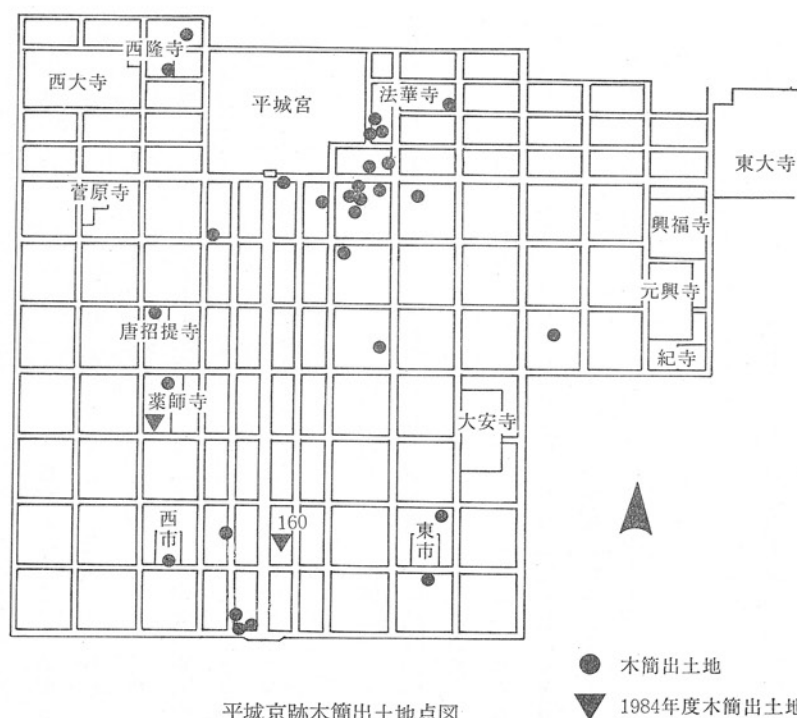




平城京跡木簡出土地点図

奈良・平城京跡

- 1 所在地 奈良市法華寺町・芝辻町・四条大路
 - 2 調査期間 平城京左京二条二坊十二坪・二条大路 一九八四年(昭59)七月～二月、左京一条三坊十二坪 一九八四年一月、左京四条二坊七坪 一九八四年一〇月～十一月、左京三条三坊九坪 一九八四年九月
 - 3 発掘機関 奈良市教育委員会
 - 4 調査担当者 西崎卓哉・篠原豊一・立石堅志・奈良美穂
 - 5 遺跡の種類 都城跡
 - 6 遺跡の年代 奈良時代
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
 - 一 平城京左京二条二坊十二坪・二条大路
- 本遺跡では、さきに十二坪西半部から二条大路にわたる地域の調査を行っており、その成果はすでに報告した『木簡研究』第五・六号。今回の調査は十二坪東半部からわずかに二条大路にかかる地域を対象として行った。両調査区をあわせて四五二〇㎡、十二坪の三分の一ほどを発掘したことになる。
- 今回検出した主な遺構は二条大路の一部とその北側溝・築地塀・



(奈良)

礎石建物二棟・回廊・掘立柱建物二〇棟・井戸二基・土壇である。さきの調査成果とあわせて、十二坪が一町を分割することなく利用されており、中央の正殿を回廊で取り囲むというきわめて整然とした建物配置をもつことが知られた。

木簡は二条大路の北側溝から二二点が出土した。同溝は幅三・五〇・五m、深さ〇・七mほどの素掘りの東西溝。今回は四〇m分を検出している。堆積層からみて、溝には新・旧の二時期があり、それぞれの時期の堆積層はさらに細区分できる。木簡は、このうち新期の溝の最下層、黒色粘土層から出土した。他に瓦・土器・木製品が出土しているが、この中には「店梨」の墨書土器が含まれる。また、十二坪内では「相撲」「□撲所」「左士」「真万呂」などと墨書された土器が出土している。

二 平城京左京一条三坊十二坪

本調査地は十二坪の東辺部、十二・十三坪坪境小路にほど近い地点にあたる。発掘面積は六〇㎡と小範囲であったが、井戸一基・柱穴・自然流路を検出した。柱穴は発掘範囲が狭いこともあり建物と

してはまとまらない。このうち井戸から四点の木簡が出土した。

井戸掘形は、検出面では径一・五mの平面円形を呈し、深さは二・五mある。井戸枠は存在しておらず、おそらくは素掘りのまま使用されたのであろう。井戸内の堆積土は、井戸底近くの自然堆積とその後の埋めたてによるものと大きく二分できる。木簡は自然堆積土の最上層、植物遺体層から出土した。この井戸からは他に奈良時代前半期の土器と数点の木製品が出土しており、木簡もこの時期に投棄されたと考えられる。

三 平城京左京四条二坊七坪

本調査地は七坪の東辺部から東二坊間大路の一部に相当する。周辺は平城京跡内でも比較的調査例の多い地域であり、調査地の東、東二坊間大路を隔てた左京四条二坊の東半は「田村第」に比定されている。今回検出した主な遺構は東二坊間大路の一部とその西側溝、掘立柱建物四棟、塀一条、井戸一基、土壇である。

木簡は東二坊間大路西側溝から二点が出土した。同溝は幅一・九〇・三・一m、深さは発掘区北端で〇・三m、南端で〇・八mの素掘りの南北溝。今回は一三・五m分を検出した。溝内の堆積土は大きく上・下二層に分けることができる。このうち下層はさらに二分でき、木簡はその最下層から出土した。上層は流れのためか二・五層と複雑な堆積となっており、奈良時代後半期の土器が出土した。

四 平城京左京三条三坊九坪

調査の結果、現地表面下約一・三mで発掘区全域に広がる自然流

路を検出した。発掘面積が四〇・五坪と小範圍であったためその規模は不明であるが、堆積層からみて流路には新・旧二時期があることがわかる。木簡は旧流路内の堆積土から一点が出土した。旧流路からは他に古墳時代の埴輪片、近世の土器など各時代の遺物が混乱して出土しており、木簡の年代を決めることはできない。

一左京二条二坊十二坪・二条大路

- (1) 封 (158) × 30 × 4 039 *
- (2) 篠嶋大 $\left[\begin{array}{c} \text{加} \\ \text{マ} \\ \text{定} \\ \text{カ} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right] \square \text{大}$ 158 × 26 × 8 031 *
- (3) 「水精玉所食 $\left[\begin{array}{c} \text{人} \\ \square \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{舍} \\ \text{カ} \end{array} \right] \text{人}$ 二人官守。」 (穿孔) $\left[\begin{array}{c} \text{集} \\ \text{カ} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right] \text{麻呂。}$ (穿孔) $\left[\begin{array}{c} \text{受} \\ \text{カ} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right] \text{検} \square \cdots \cdots \text{寸}$ (125 + 75) × 30 × 3 011 *

- 17

(12) ・ $\angle$ 播磨国飾 $\square$ 〔磨カ〕 $\times$

・ $\angle$ 史戸大田 $\square$ $\times$

(77) $\times 17 \times 3$ 039 *

(13) ・ $\angle$ 〔返カ〕 $\square$ $\square$ $\square$

右 $\square$ 工五人

・ $\angle$ $\square$ $\square$ $\square$ $\square$ $\square$

(156) $\times 19 \times 5$ 019

(14) ・道 $\square$ 秦忌寸乙 $\square$ 〔公カ〕 $\square$

・ $\square$ 〔人カ〕 $\square$ $\square$ $\square$

(91) $\times (17) \times 2$ 081

(1) は材の上端近く、左右の切り込みがある部分に「封」字のみを墨書する。下端を欠損しており全体の形状は明らかではない。「封」字はその中央で、横方向に幅六皿ほどとぎれている。これは長方形の材を紐で物品（あるいはその容器）に固定したのち、紐の上から「封」字を記したからだと考えられる。つまり、この木簡をもって封をしたのであろう。(3) は二片に分離しており、直接には接合しないが、材質・形状からみて同一簡かと思われる。他に墨痕はあるが判読不可能なもの七点がある。

二 平城京左京一条三坊十二坪

(1) $\angle$ $\square$ $\square$ $\square$

98 $\times 15 \times 3$ 033

他に折損により原形が明らかでなく、墨痕はあるが判読不可能なもの三点がある。

三 平城京左京四条二坊七坪

(1) $\angle$ 石見国那賀郡石 $\times$

(152) $\times 21 \times 5$ 039

(2) $\square$

(80) $\times (8) \times 2.5$ 081

四 平城京左京三条三坊九坪

(1) ・ $\angle$ $\square$ $\square$

・ $\angle$ $\square$ $\square$

・ $\angle$ $\square$ $\square$

45 $\times 24 \times 8$ 021

材の一側面にも墨痕がある。〇二一型式としたが、中世木簡の範疇でとらえるべきものかもしれない。

9 関係文献

平城京左京二条二坊十二坪水道局庁舎建設予定地発掘調査会『平城京左京二条二坊十二坪―奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告―』（奈良市教育委員会 一九八四年）

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和五九年度』（一九八五年）

（西崎卓哉）